

フィリピンの教科書記述における外界からの影響

市川 誠

I はじめに

フィリピンの出版大手レックス社発行の教科書（小学校4年生）には、図1のような概念図が挿入され、フィリピン文化が外界からの影響をうけて形成されてきた様子が示されている。各要素の構成や配置、バランスの当否には議論の余地があるが、古くは海上交易、後には植民地支配を通

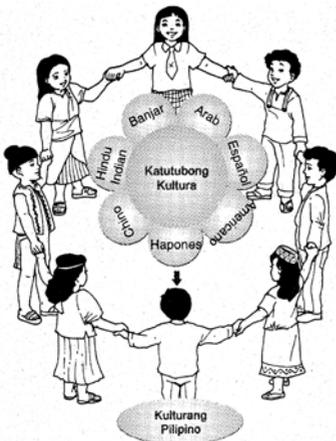


図1 フィリピン小学校教科書の挿入図：
 自国文化形成への諸文化の影響

出所：Antonio, Eleanor et al., *RBS Serye sa Makabayan, Makabayan 4*, Rex Book Store, 2004, p. 459.

じての諸文化圏との交流がフィリピン社会の形成に少なからぬ影響を与え、今日もそのあり様を規定していることは、これまでの研究の指摘するところである。

本稿ではこうしたフィリピンの人および社会の姿と、その形成過程への外界からの影響とが、教科書の中でどのように描かれているのか検討する。教科書の記述は教育当局の意図に沿った独自の観点からなされ、内容の強調や選択がされていると考えられる。そうした教科書固有の内

容や記述の仕方の分析を通じて、読み手である生徒に抱かせたい自己イメージ・自国のイメージや、そのための方策への接近を試みたい。教育内容への当局の意図の反映は多くの国や地域に普遍的なテーマであるが、ここでは自国文化の形成過程への外界からの影響に焦点をあて、外来文化から様々な影響を受け、その多くが植民地支配に由来するフィリピンの場合にはどのような特徴があるのかをみていきたい。

以下ではまず、外界との交流・影響関係に焦点をあてながらフィリピン史を概観する。(Ⅱ章)¹⁾次いで、外来文化による影響の教科書の中での描かれ方の特徴を検討する。(Ⅲ章)²⁾なおⅡ章では近年のフィリピン史研究の成果に依拠するが、これらの研究も、それぞれの歴史イデオロギーに基づいて行われたということが出来る。³⁾このためⅡ章の方が「公正・中立」な記述で、分析対象の教科書は「特定の意図をもって書かれた偏ったもの」であるとみなすのではなく、後者の特徴を浮かび上がらせるために前者との対比を行うというのが本稿での考え方である。

Ⅱ フィリピン史における外界との関係

Ⅰ 植民地化以前

フィリピン史の詳細な記述はスペイン植民地期から始まるのが通例で、それ以前については「先史」「先スペイン期」などの見出しで比較的短く描かれてきた。それによると諸島の住民は中国商人やアラブ商人と交易を行っており、またインドネシア経由でインド文化が伝播していた。こうして諸文化圏の技術・文化がもたらされていた。

14世紀後半にはブルネイに近い南部のスルー諸島にイスラム社会が形成され、スペイン遠征隊の来島する16世紀後半には諸島の北・中部にまでイスラムの影響が及んでいた。

2 スペイン植民地期

スペインによるフィリピン統治はカトリック教会と修道士による精神的支配を、それに続くアメリカ統治は公立学校と英語教育による文化的支配を、それぞれ支柱としたとされる。スペイン支配圏では住民のほぼ全員がカトリックに改宗し、今日も人口の8割以上がカトリックで占められる。ただしスペインの支配とカトリックの布教は現在のフィリピン共和国の全域に及んだわけではなく、このことが国内の宗教的分断の要因となってきた。スペイン支配の及ばなかった地域のなかでも南部のミンダナオ地方に集住するムスリムによる分離独立運動は、1970年代の紛争以来、統合を阻害する深刻な対立要因となってきた。

またスペイン支配圏も分割して統治されたため、キリスト教圏も一つの共同体に統合されなかった。フィリピンには多数の言語集団が存在するが、修道士らスペイン人は原住民にスペイン語を教えるかわりに自身が現地語を習得し、全島で意志疎通を可能とするような共通語を発達させなかった。こうして地域的、言語的な分断状況を維持することで、スペインは容易に植民地体制を維持することができた。この言語的な分断は、今日なお、共通言語（国語）形成の阻害要因としてしばしば顕在化する。独立後、国語は実質的に、主要言語の一つであるタガログ語を母体に形成されてきたが、これに対し非タガログ語勢力がその普及に反対したり、国語ではなく英語の使用を推進するといったことがみられるのである。⁴⁾

さらにスペイン植民地権力の後楯を得た政治的・経済的特権階級の形成により、原住民社会には階層的な分断も生じた。原住民のなかで末端の植民地官吏に登用された者たちは、徴税・労役の徴用を通じて蓄財し、長老層（プリンシパーリア）と呼ばれる特権階級を形成した。その後19世紀には、マニラ開港後の輸出向け商品農業や商業、貿易の発展により新興の有産階級が生まれた。彼らはスペイン人のために開設されていたマニラの

大学に子弟を送り、弁護士や医師などの専門職につかせるようになった。ヨーロッパへ子弟を留学させる者も現れた。彼らの中から、民族主義に目覚め、次にみるプロパガンダ運動の担い手となる者が現れる。

3 プロパガンダ運動・フィリピン革命・比米戦争

プロパガンダ運動は、ヨーロッパ自由主義思想にふれた開明的知識人たち（イルストラド）が担ったスペイン当局に対する改革要求、ならびにフィリピン人自身に対する啓蒙活動で、19世紀末に展開された。中心地は亡命者・留学生の集まるマドリードとマニラであった。マルセロ・デル＝ピラールが1882年、マニラで『タガログ新聞』を発行し、その後ロペス＝ハエナらとマドリードで『ラ・ソリダリダド』を発行した。（1889年～1895年）ホセ・リサールはスペイン語で2冊の政治小説『ノリ・メ・タンヘレ』（1887年）『エル・フィリプステリスモ』（1891年）を著した。リサールは1892年に帰国し、市民団体「フィリピン同盟」を設立したが、数日後に逮捕され団体は短命に終わった。

プロパガンダ運動が目指したのはスペイン人と同等な権利要求やスペイン議会での代表権などであり、分離独立を目指すラディカルなものではなく、平和的改革運動であった。10年以上にわたった一連の運動はフィリピンに民族主義の思想を広めた一方、改革の追求では何ら成果をあげることなく資金不足のうちに途絶えており、有産知識階級による改革運動の限界を露呈したとされる。

なお上述のリサールは、アメリカ植民地期に国民的英雄の地位を与えられた。全国の広場や学校に銅像が建てられ、町や通りにその名がつけられた。他の歴史上の人物にはない特別な扱いとすることができる。今日に至るこうした扱いに対しては、急進的革命家でなく改良主義者でアメリカにとり望ましかったため英雄に選ばれたのであり、その功績が過大評価され政治的に利用されてきたとも指摘される。

1892年、プロパガンダ運動の一部メンバーが方向転換し、武力による独立をめざす結社「カティプーナ」を結成した。カティプーナは1896年に蜂起し、フィリピン革命が開始された。このときキューバをめぐる米西戦争に入ろうとしていたアメリカはフィリピンにも派兵し、フィリピン革命軍とともにスペイン軍を撃退した。革命軍は独立を宣言したが、アメリカはフィリピン領有を宣言し、比米戦争をへて20世紀前半のアメリカ植民地期が始まった。

このフィリピン革命史の研究で注目されるのが、カティプーナの創始者アンドレス・ボニファシオの扱いである。ボニファシオは革命の主導権争いでエミリオ・アギナルドらと対立し、1897年に粛清された。アギナルドはプリンシパーリア出身で、日和見主義的に振る舞い、アメリカ軍に逮捕された後アメリカ側に協力したが、今日ではフィリピン共和国初代大統領と位置づけられ、フィリピン革命の主要な担い手の一人とされてきた。これに対しボニファシオは初期のフィリピン史研究ではほとんど取り上げられてこなかった。これは労働者階級出身のボニファシオが、リサールの場合とは逆に、英雄とされることがアメリカにとり望ましくなかったためと指摘される。アメリカはフィリピン革命への介入を正当化する必要があったが、革命が「大衆自らの意思による蜂起」とされた場合、介入は大衆への弾圧となり正当化は困難であった。アメリカにとり、革命は「アギナルドら権力者層の指導した蜂起」であり、大衆は盲目的に追随していただければならなかった。このため「大衆出身の革命指導者ボニファシオ」の英雄視は望ましくなかった。アメリカ人研究者が中心だった初期のフィリピン史はこの立場から描かれており、ボニファシオはリサールの陰に隠れていた。その後フィリピン人研究者らによる見直しが行われ「貧しい労働者階級出身で、十分な学校教育を受けず独学で学び、大衆に革命思想を広めたボニファシオ」が認知されるようになった。⁵⁾

4 アメリカ植民地期

アメリカは、自国をモデルにフィリピンを近代的な国家へと改造し、そのうえで独立を付与することを植民地統治の目標とした。将来的な独立を前提としたことは、植民地を恒久的に保持しようとしたスペインや他の西欧列強の植民地政策と異なった。そのためにアメリカは、交通・通信などのインフラ建設に加え、近代的な社会制度の整備をすすめた。制限を課しつつも「自治の訓練」のため選挙制度を導入し、1907年には選挙をへてフィリピン議会を開設した。こうして導入された民主的政治制度の枠組みは独立後も保持され、フィリピンはアジアにおけるアメリカの「民主主義のショーウィンドー」と呼ばれてきた。

アメリカはフィリピンで大衆教育を早くから整備したことで知られる。1901年には公立小学校制度が創設されており、1920年代に初等・中等段階公立学校の生徒数は当該学齢人口の40%近くに達していたとする統計もある。これは、他の列強植民地で原住民の教育が特権階級に限定されたのと対照的で、アメリカ植民地教育政策の優れた業績とされたが、その一方で、問題点も指摘された。アメリカで使用されていた教育課程や教科書が持ち込まれたため、教科書の挿絵の子どもは白人であり、「苺」や「雪」などの言葉が使われていた。また英語を普及させて社会を統合する共通語とする方針から、学校での授業はすべて英語で行われた。アメリカによる学校教育とそこでの英語教育は、フィリピン人にアメリカ社会の価値観と文化嗜好を植えつけ、自身の文化を軽視する態度を生じさせたといわれる。

半世紀のアメリカ統治の後フィリピンは1946年に独立するが、これはアメリカ議会の定めた法律にしたがって実現したものであった。この時のフィリピン側の運動は武力闘争ではなくアメリカとの交渉であり、独立はアメリカから「認められた」ものであった。これと対照的に、先述の対ス

ペイン・フィリピン革命は独立闘争を通じ短期的にせよ独立国家を実現したものであり、この意味で、フィリピン人の最も誇りとする出来事ということができる。

なお、太平洋戦争中の日本占領下の学校教育では、日本語の普及と将来的な英語の廃止が目指されるとともに、タガログ語が奨励された。実質的
日本占領下の独立共和国の憲法は英語とタガログ語で書かれ、タガログ語が国語とされた。

III フィリピン社会・文化への外界からの影響 ——教科書の記述の仕方

1 統合教科「マカバヤン」

現在の小学校の教育課程は2002年度から導入されたもので、フィリピン語（国語）、英語、数学、科学・保健、および「マカバヤン (Makabayan)」の5領域からなる。「マカバヤン」は現行課程で初めて設けられ、旧来の「地理・歴史・公民」や「音楽」「美術」「体育」「家政・職業」がここに統合された。その導入には、科目数過多への対応という授業運営上の必要に加え、国民統合の推進が期待されたといわれる。このことは、「愛国的な」「愛国者」を意味する“makabayan”を教科名としたことに象徴的に示される。⁶⁾ 本稿では、歴史や地理の分野を含んでいるこの「マカバヤン」を分析の対象とする。

「マカバヤン」の4年生の教育目標には「我々がフィリピン人であることを示す文化を誇り、尊重するようになる」⁷⁾ ことが含まれている。レックス社の4年生用教科書では、第4章「私たちの文化の発展」がこれに該当するとみられる。⁸⁾ 本稿では、この章なかの第3節「外国との関係からの影響」に注目する。この節は、タイトルの通り今日のフィリピン文化にみられる外界からの影響を、スペイン、アメリカによる植民地期に加え、それ以前の時期のものまで含めて取り上げている。以下では、この節の記

述の仕方の特徴をみるとともに、それらの特徴の背後にあるとみられる意図を考察する。

2 教科書の記述の特徴

1. 誇りの提示（1）外来文化による豊かさ

多くの文化圏からの影響があるとされているのが言葉、すなわちフィリピン語の語彙である。アラブに由来のものとして *sulat*（手紙）や *alam*（知識）、*salamat*（感謝）、中国からは *ate*（姉）、*susi*（鍵）、インドからは *balita*（知らせ）、*asawa*（配偶者）、*Bathala*（神）、*hari*（王）、スペインからは *silya*（椅子）、*mesa*（テーブル）、*sibuyas*（玉葱）、*tasa*（カップ）、*kabayo*（馬）などがあげられている。

ただしアメリカ由来のものはあげられておらず、英語はまだフィリピン固有の言語の一部となったとはみなされていないようである。その背景には、英語が今も公用語の一つであり広く使われていることがあると思われる。スペイン語など他の言語は今日ほとんど話者がいないのに対して、英語は今なおフィリピン語と並立しており、そのことの方が意識されているとみられる。

また語彙の他に、スペイン由来の人名（*Juan*, *Maria*, *Rosario* など）があげられる一方、アメリカ植民地期には *Carlos* が *Carl* に、*Jose* が *Joe* に変わったと記されている。

料理も様々な文化圏に由来のものがあるとして、中国から子豚の丸焼、春巻、八宝菜、麺などがあげられ、スペイン由来として *menuedo*（肉の煮込み）や *asado*（ロースト肉）があげられている。一方、アメリカ植民地期にソーセージやイワシの缶詰を食べる習慣が始まったと記されている。

また産業や技術工芸の領域での影響として、アラブからの火薬、中国からの磁器や金属道具、日本からの魚の養殖や家禽の飼育があげられている。

このように、多数の文化圏、とりわけスペイン、アメリカ以外にもフィリピン文化の由来があったと強調することは、「旧植民地宗主国の文化に多くを負う下位のフィリピン文化」というイメージを排し、かわりに図1のように「多様な文化が伝播してフィリピンで豊かに開花した」という見方を読み手に示し、このことに誇りを抱かせることを意図しているのではないかと思われる。誇るべき自国文化の豊かさは、ここでは「由来・起源の豊かさ」にあると考えられる。またアメリカ植民地期を別にすれば、いずれのものも数世紀をへて定着しており、十分な「古さ」をもつ「伝統文化」としても誇りにできるもの考えられる。

さらに「誇り」という側面に加えて、上記の言葉や料理への言及には、「それらを共有するフィリピン国民」という意味も込められているのではないかと思われる。国内で広く共有されている文化や習慣を強調することは、「マカバヤン」に期待される国民統合の有効な手段であると考えられる。

ただしこの点で気掛かりなのが、カトリシズムに基づく祝祭や行事への言及である。スペインからの影響としてあげられているもののなかには、町の守護聖人の記念日の祝祭や聖週間の儀礼、その他の祈祷が含まれている。これらは多数派のキリスト教徒の間で普及し定着しているとしても、他宗派の人々はそれらを共有していない。教科書のなかのこうした記述が宗教的少数派に属する読み手の小学生にとってどのような意味をもつか、注意深く検討する必要があると思われる。

2. 誇りの提示（2）早期の社会制度導入

検討した節のタイトルには「文化」とあるが、実際には広く政治・経済・社会制度まで言及されている。そこでは、周辺諸国をはじめ他の発展途上国と比べて早期に導入された近代的な社会制度についての記述が少なくない。

スペイン植民地期の部分では、現存するアジア最古の大学とされるセント・トーマス大学（1611年設立）と、より早期に設立されたサン・イグナシオ大学（1589年）について記されている。実際には、これらの大学が当初受け入れたのはスペイン人だけであり、原住民の入学が認められるのは19世紀に入ってからであるが、そうしたことにはふれられず、設立されたことだけが記されている。大学が早くから設立されていたことへの言及には、高い文化水準の伝統を暗示することで、読み手に自国への誇りを抱かせる意図があると思われる。

またアメリカ植民地期の部分では、初等・中等段階の学校開設が言及されているが、これも他の発展途上国と比べて早くに実現されていることから、同様な誇りをもたらすことを意図していると思われる。⁹⁾ 病院など医療機関の建設や交通・通信インフラの整備が進められたこと、民主的な選挙制度や政教分離が導入されたことも記述されているが、これらにも同様な意図があるとみられる。いわば「近代化の先駆」であったことが誇りとされていると考えられる。

3. 「マカバヤン」の提示（1）プロバガンダ運動

この節のなかで、先述の民族主義の運動に関する記述は特徴的である。運動に参加した者たちについては、次のように記されている。

私たちの祖先は、非常に勇敢で、フィリピンを解放したいと願って
ました。……フィリピン人の間に、ナショナリズムの精神を駆り立
てたのは、母国への強い愛、自由になり独立したいという願いでし
た。¹⁰⁾

民族主義運動の担い手たちの勇気と祖国への愛が強調され、その献身が讃えられている。これだけの賛辞は他の時期の記述にはみられない。フィリ

ピン史のなかでもつばらこの時代の民族主義運動がこのように強調されている。自身と同胞の解放のため、外からの支配に立ち向かった人々が「マカバヤン」とされているということができる。

ところで、この民族主義運動のなかでプロバガンダ運動が比較的詳細に記述されているのと対照的に、フィリピン革命についての言及は限定的である。前者では、リサール、ロペス＝ハエナ、デル＝ピラールらの名があげられ、リサールの2冊の著作や刊行物『タガログ新聞』『ラ・ソリダリダド』、リサールの組織したフィリピン同盟が言及されている。一方、後者では、ボニファシオによってカティプーナが組織されたことが記されているだけで、それは「フィリピン同盟と同じような目的をもった運動のひとつ」¹¹⁾と説明されている。民族主義運動はもつばら穏健で改良主義的な運動であったかのような印象を与える記述ということができる。先述の、リサールとボニファシオの対照的な扱いの問題がこうした記述の仕方の背景として考えられる一方、この節のテーマが「文化」であることも理由の一つである可能性もある。言論活動を中心としたプロバガンダ運動の方がテーマと合致し、武力闘争であったフィリピン革命はテーマから遠いと考えられるからである。この点についての判断のためには、教科書のより総合的な内容分析が必要となる。

4. 「マカバヤン」の提示(2) 自国文化の尊重

上述のような政治的な運動への参加とは別に、一般の人々の態度・行為のなかに「マカバヤン」の模範を示していると思われる箇所がある。それは日本占領期にフィリピン語が使用されるようになったことを記述した部分で、次のように記されている。

若い世代はフィリピン語を執筆に使いました。日本人は、英語で書くことを許さなかったため、彼らはより一層フィリピン語を受け入れる

ようになりました。また、これは、フィリピン人の愛国的態度を示すものでもあったのです。¹²⁾

被占領下で強制された結果でもあったにもかかわらず、フィリピン固有の言語を書き言葉として使用したことが称賛されている。自分たちに固有な文化・伝統を尊重・推進した人々が「マカバヤン」であるとされ、そうした行為が模範とされているのである。

このことを、逆に望ましくない態度の方から示していると思われる箇所もある。アメリカ植民地期のアメリカ礼賛の風潮のなかで伝統的な習慣が失われたことは、次のように、批判的に記されている。

子どもの親に対する態度が変化しました。彼らは敬意を表して、両親の手にキスをしなくなりました。キスしないようになっただけではなく、「ハイ」と言うだけになりました。親類縁者の結束が緩くなりました。……アメリカ文化がフィリピンの習慣にとってかわりました。¹³⁾

上と対照的に、「古きよき伝統」を守らないことが否定的なニュアンスで描かれている。こうした記述は、固有の文化・伝統に対する「マカバヤン」な態度・行為の基準を示しているものと考えられる。¹⁴⁾

5. 国民統合の推進

先の民族主義運動の記述では、模範の提示に加えもう一つの特徴として、「国民の連帯」が強調されているように思われる。有産知識階級の子弟のヨーロッパ留学と、カティプーナンの結成については、それぞれ次のように記されている。

裕福な人達は、スペインやその他ヨーロッパの国に行って特定の分野を専門とし、それを母国の人々と共有しようとしていました。¹⁵⁾

彼らはみんなひとつになって、切望する自由を達成するため、秘密結社さえ結成するようになりました。¹⁶⁾

これらの記述は、当時のフィリピン人や民族主義運動の結束・連帯を過度に強調しているように思われる。有産階級の留学生のなかから民族主義者でプロパガンダ運動を担う者が現れた一方で、もっぱら個人や家族の社会的上昇・成功を追求した者も少なくなかったとみられる。またフィリピン革命期には自身の利益を優先して行動した者たちがいた。さらにカティプーナンの中では、貧困層出身のボニファシオらとプリンシパーリアのアギナルドらの間に対立があった。教科書の記述は、そうした分断にはふれることなく、当時の民族主義運動の連帯・結束のみを強調しているようにみえる。こうして「連帯したフィリピン社会」をことさらに強調するのは、そうした社会の像を読み手の意識に植えつけることで、現実の社会における国民統合も進展すると考えられているためではないかと思われる。

またもう一つ、別な方法による国民統合を意図したと思われる記述がみられる。それは、被植民地下での人々の苦難・困窮の記述で、とりわけ太平洋戦争中の日本占領期の部分では次のように記されている。

日本支配の時期、わたしたち同胞の苦難は続きました。……市民の健康は、貧困や食べ物の不足……の影響を受けました。多数の人が、病気や飢餓で亡くなりました。¹⁷⁾

これは、「痛みの共有、共感」という伝統的な“damay”の感情にうったえるものではないかと思われる。フィリピン人がみな日本の占領下におか

れ、抑圧や困窮を共通に経験したという記述は、フィリピン人の“damay”の感情に説得的に訴え、「一つになったフィリピン社会」という像の受入れを助けるものと思われる。日本占領期ほどの深刻さの強調はないが、スペイン植民地期の抑圧やそれによる困窮についての記述にも、同様な意図があるように思われる。

IV おわりに

本稿で検討した教科書の部分では、今日あるフィリピン文化が多様な外来文化を取り入れて形成されてきたとされ、それゆえフィリピンの文化は「豊か」であり「誇るべき」ものであるとして、肯定的に描かれている。そして、こうしたフィリピンの文化を尊重し、守ることが「マカバヤン」であり望ましい態度であるとされている。植民地宗主国によってもたらされた近代化も、発展途上国の中で先駆であったことから、「誇るべき」ものとされている。また、スペイン植民地支配に対し展開された民族主義運動の担い手たちが「マカバヤン」として讃えられているが、そこでは言論活動が特にクローズアップされていた。

こうした記述の仕方について、その意図との関連で注意を要すると思われる点を最後に指摘しておきたい。第一に、「多様で豊かな文化」を誇りとしている点について、そのなかに国民のすべてに共有されていない習慣や文化が含まれていることである。特にそれらが多数派に固有なものの場合、少数派に属する読み手にとっては誇りとならないだけでなく、疎外感をもたらすことが危惧される。先述の、カトリックに基づく祝祭や宗教儀礼についての記述がこれにあたる。これは旧来の「キリスト教国フィリピン」という像の名残と思われるが、ムスリムをはじめカトリック以外の読み手にとり、自分たちが周縁化されていると感じさせるものであり、国民

統合を妨げるのではないと思われる。またこうした記述のある教科書そのものが「自分たちの教科書でない」と認識され、その結果、該当部分に限らず教科書全体の教育効果が損なわれる可能性もあるように思われる。

同様な懸念は、高等教育や医療機関など社会制度の整備の記述にもあてはまる。貧困や地域間格差に起因して、大学や病院にアクセスできない者が今日も少なくないからである。教育サービスや医療サービスを享受できない者にとり、それらの設立が歴史的に古いことや周辺の国々に先行していたことが「誇り」となりえるのかどうか、注意を要するところである。

この他に注意を要すると思われるのが、スペインの扱いである。スペインは旧宗主国として相対する2つの側面から取り上げられているようにみえる。一つの側面はフィリピン文化の源としてのスペインであり、言葉や料理から、カトリシズムとそれに基づく伝統的な祝祭・行事まで、豊かな文化をフィリピンにもらしたとされる。もう一つは征服者・支配者としてのスペインであり、フィリピン人の祖先は彼らのもとで苦難の生活を送り、愛国的な者たちが彼らに抵抗したとされている。このようにスペインとの歴史的関係について肯定的・否定的な内容が整理されないまま併記されることで、読み手のスペイン理解・比西関係史理解は矛盾をはらむようになると思われる。これがどのように調整されているのか、または調整されていないのかを検討するためには教育課程全体の分析が必要であり、今後の課題とされる。

最後に、国民統合を意図したとみられる記述の問題にふれておきたい。Ⅱ章でみたように、植民地統治に起因してフィリピン社会は宗教的、言語的、階層的に分断されており、その統合が課題とされてきた。これについて、検討した教科書の部分は、分断の歴史的経緯に言及せず、フィリピンを実態以上に統合された社会として描いていた。上述のように、統合された架空のフィリピン社会の像を教科書を通じて国民に植えつけることで、この理想の社会を現実のものとするを旨としていると考えられる。こ

うした方法の当否の考察は本稿の射程をこえるが、さしあたりここでは、予想される問題を2つ指摘しておきたい。一つは、分断について、とりわけその歴史的背景について学ぶ機会が与えられないということである。このことは、実際にフィリピン社会に存在する分断をいかにして克服するか考察するうえでの障害となると思われる。もう一つは、読み手が体験や身近な見聞から現在の分断を認識している場合、教科書で描かれたものとのギャップによって、教科書への信頼が損なわれるということである。このことは、上述の宗教的少数派の問題と同様に、教科書全体の教育効果に影響を及ぼすと思われる。

本稿では、教科書の記述の特徴を検討し、その意図を読み取ろうと試みた。実際に教科書の読み手である小学生が受ける影響、すなわち教育効果は、学校現場での教科書の利用方法によっても左右される。その究明には、本稿とは異なるアプローチによる取組が必要となる。今後の課題としたい。

注

- 1) II章のフィリピン史の記述は主に以下によった。池端雪浦・生田滋『東南アジア現代史II』山川出版, 1977年; 池端雪浦『フィリピン革命とカトリシズム』勁草書房, 1987年; サイデ, グレゴリオ・F (松橋達良訳)『フィリピンの歴史』時事通信社, 1973年. 鈴木静夫『物語フィリピンの歴史』中公新書, 1997年.
- 2) 次の教科書を参照した。Antonio, Eleanor et al., *RBS Serye sa Makabayan, Makabayan 4*, Rex Book Store, 2004. なお本稿で参照した箇所は、日本語の対訳とともに次に収録されている。世界の宗教教科書プロジェクト『世界の宗教教科書』大正大学出版会, 2008年 (DVD 出版)
- 3) フィリピン史研究における歴史イデオロギーについては 永野善子『歴史と英雄—フィリピン革命百年とポストコロニアル』御茶の水書房, 2000年を参照。
- 4) 国語 (national language) の名称はこれまで“Pilipino” (1959年の教育省令) や“Filipino” (1973年憲法) に変更されてきた。本稿では便宜上すべての期間を通じて「フィリピン語」で統一する。なお国語政策への近年の非タガログ語勢力の対応については次を参照。大上正直「フィリピンの言語政策」小野沢純編著『ASEANの言語と文化』高文堂, 1997年, 67頁; 河原俊昭「フィリピンの国語政策の歴史—タガログ語からフィリピン語へ—」河原俊昭編著『世界の言語政策—多言語社会と日本—』くろしお出版, 2002年, 87頁.
- 5) リサーチとポニファシオの歴史的評価については次を参照。コンスタンティーノ, レナト『フィリピン・ナショナリズム論 上』井村文化事業社, 1977年; 永野, 前掲書。
- 6) 2002年からの教育課程と新科目“Makabayan”については 長濱博文「フィリピンの教育計画」『現代アジアの教育計画 (下)』学文社, 2006年を参照。
- 7) Department of Education, “Training Program on the Implementation of the 2002 Basic Education Curriculum Reform”, 2002, p. 10.
- 8) この4年生向け教科書の他の章は地理の内容で、フィリピンの地形や季候、各地の特徴などが取り上げられている。
- 9) 小学校や大学の普及・水準で、当初フィリピンは発展途上国のなかで先行していたが、近年は後から教育開発の進んだ国々にキャッチアップされてきており必ずしも優位にあるとは言えない。この点で、過去に先駆であったという実績は、その後にリードを維持できるか否かに左右されることなく、安定して「誇り」の拠り所をもたらすものということができる。
- 10) Antonio et al., p. 452.

- 11) Antonio et al., p. 453.
- 12) Antonio et al., p. 458.
- 13) Antonio et al., p. 457.
- 14) この引用箇所では、アメリカからの文化的影響によって、フィリピンの伝統文化・慣習が損なわれたとして批判されている。これは、それ以前の外界からの影響がフィリピン文化を豊かにしてきたとして肯定的に記されているのと対照的である。アメリカからの影響が比較的最近のことであり、いまだ「伝統」として定着していないという面もあると考えられるが、それだけでは説明として不十分なように思われる。比米関係についての教科書の他の記述をふまえないと断定することはできないが、独立後の今日も脱米化が課題とされるほどに特殊な比米関係と、それにとまなう国民感情が背景にあるのかもしれない。
- 15) Antonio et al., p. 451.
- 16) Antonio et al., p. 452.
- 17) Antonio et al., p. 458.